祓後行事料、〇中略　鹿皮一張、（中略）已上、阿波國麻殖那賀兩郡所レ輸、

〔延喜式二十四主計〕凡諸國輸調、〇中略　大鹿皮一張、六尺以上　小鹿皮二張、四尺以上

〔本朝奇迹談元大和〕又同國十津川千本鎗の百姓居住す、則此所にて御朱印被二下置一、長サ拾九里程横三里程有と云、田畑山林有、此所の百姓共、御預りの鎗千筋、鐵炮千挺、弓千張、今に在、御上洛の節、二條御城の御裏御門江相詰ると云、其節は鹿の皮千枚獻じ奉ると也、

〔新撰六帖二〕鹿　家良

五月雨のひまなきころも小男鹿のうはげのほしはくもらざりけり

〔夫木和歌抄七首夏〕家集首夏の心を　源仲正

おちかはるふたげの鹿のくもりほしやゝあらはるゝ夏はきにけり

異形鹿

〔日本書紀二十七天智〕十年四月、是月筑紫言、八足之鹿生而卽死、

鹿種類

〔南留別志四〕一吾邦にて、大牢といへるは、大鹿、小鹿、猪なり、

〔百品考下〕小鹿〇中略

天保四年、蠻舶小鹿二匹ヲ載來ル、高サ五六寸、常鹿ト異ナルトコロナシ、雄ニハ角アリ、雌ニハ角ナシ、雄ハ長崎ニテ死ス、雌ハ大坂ヘ來リ江戸ヘ持行シト云、終ルトコロヲシラズ、

〔紀伊國續風土記物産十下〕須波伊（スハイ）て角に岐なく、本幹の如し、故に名づく、總て鹿は角二岐のもの九州にてサチシカといふ、牡鹿と同名なり、形常鹿より小にしは二聲鳴き、三岐のもの三聲なく、此鹿は幾聲もなくといふ、

國中深山ニ鹿數十群居の中、稀に一二匹交はり居る事あり、

〔紀伊國續風土記物産十下〕白鹿（シロシカ）本草

國中深山稀にあり、享和二年、牟婁郡三木庄尾鷲郷の間八鬼山にて捕るもの、目及四足の爪赤し、

〔日本書紀七景行〕四十年十月、日本武尊進入二信濃一、是國也、山高谷幽、翠嶺萬重、人倚レ杖而難レ升、巖嶮磴紆、